

大学における照明教育について

千 早 正 美 (日本大学)

日本大学芸術学部演劇学科では、昭和25年、学科が創設されて間もなく、遠山静雄師を迎えて舞台照明（舞台美術を含む）の講座をはじめて開講しました。その後、昭和43年学則改正に伴い、コース制度を導入して以降、近代演劇を中心とした「照明教育」に重点を置いてきました。

現在、照明専攻の学生を対象に4年間、どのように照明の教育をしていくのかが、論議的になっているところです。舞台照明コースの教育理念は『舞台照明の構成と表現について基本的訓練を通じて学び、そのための基礎理論・方法論・技術・電気工学・照明デザイン、機器の操作方法などを身につけ、舞台総合実習によって実践的に創作していきます』をモットーとしています。

演劇学科には、舞台照明コースの他に劇作・理評・演出・装置・演技・日舞・洋舞の8コースがあります。

また、演劇学科の教育の基本は、『複雑な表情を見せる演劇を原理的に研究し、歴史をふまえながらも、より創造的な表現を生み出す方法と技術の基礎を研究し、錬成することにあります。「理論と歴史」と「表現方法と技術」の2分野で編成され、特に「表現方法と技術」の分野は、コース別に分けて専攻基礎の教育に力をそそいでいます』。4年間を通じて幅広く、奥深く探究可能であるように配慮しています。

その中で、各コースが参加して創造過程を学ぶ舞台総合実習（演劇・日舞・洋舞などの発表公演を行う）があります。その実習を通じて実践活動を体験させていきます。これが、大きな骨格になっています。

舞台照明コースの授業科目には、「舞台照明実習Ⅰ」「舞台照明実習Ⅱ」「舞台照明実習Ⅲ」「舞台照明実習Ⅳ」「舞台照明実習Ⅴ」「舞台照明演習」「舞台照明論」「舞台装置論」「劇場論」などがあります。それらは舞台照明を行っていくための基礎的知識や技術的知識を中心に養います。

例えば、「舞台照明実習Ⅰ」では、舞台照明の基礎になる諸工学（電気工学・電子工学・照明工学）を中心に、劇空間における照明技術や、基礎理論を論じます。又、照明器具の取扱、調光装置の原理、操作方法（コンピュータ操作卓）などを講義し、舞台照明の基本を訓練し併せて実習を行ないます。このように、他の科目を含め色彩論・明視論・照明表現など段階制によって、より高度な学習と実技をあわせて学ばせていきます。

舞台照明コースでは、いわゆる照明技術者だけを養成するのではなく、舞台照明デザイナー及びクリエイターを目指して養成していくことを目標としています。これが現在の「照明教育」の理念に繋がっています。

この数年、大学を取り巻く環境が大きく変わってきています。これは、一つは社会的現象の変化が学問の府にも影響を与えていると言えそうで、教育を受ける学生も年々受動的になってきております。そんな中で、創造性であるとか、総合性豊かな人材の育成はなかなか容易ではありません。4年間で芸術教育を行っていくことが、大変難しい状況になっているようです。それぞれの学生諸君の感性をいかに引き出してあげるかが大事なことになります。これは、先述したようにそれぞれの基礎知識の勉強を含め演劇や舞踊などの舞台発表（舞台総合実習）の実践を通して、照明コースの学生が照明デザイナー（プランナー）やオペレーター及びスタッフクルーとして参加していきます。勿論、舞台照明コースだけではなく演出コース、舞台装置コースなどそれぞれ各パートのメンバーも参加します。その中で照明スタッフがどのように作品に接していくかということが大切だと思っております。

舞踊は身体表現によって行われるため、演劇と違います。演劇には台詞がありますが、それは戯曲によって構成されているのは既にご承知の事でしょう。演劇の場合、戯曲を読んでいく作業があり、主題やテーマを的確に理解し、かつ、演出者の意図を把握しなければなりません。ですからある程度、作品の方向性が見えてきます。しかし、舞踊は、先程からコミュニケーションの問題が出ていますが、なかなか創作意図が掴めないままに月日が流れてしまう場合があります。日本舞踊やモダンダンスをどのように見て、どのように理解させるのが問題になります。照明デザインのイメージやアイデアは、照明デザイナーにとって重要なポイントになります。芸術的效果を高めるための解釈もまちまちになってしまいます。その辺の教育が教育者として大変難しいと考えます。

例えば、この踊りは何を表現しているかわからないという場合があります。創作意図・テーマが実際に踊られている部分と受け止めた部分がずれてしまうことがあります。そのようなときに、舞踊創作者と照明デザイナーとの考え方が一

致せず両者間がギクシャクしてしまうことがあります。それをどのように修正していくか、また、照明デザインを創るときに1作品だけでなく全作品・発表会全体の流れを含め、仕込みの段取りや色・器具の選択などをどのように考えさせるかが、教える側として難しいことです。照明教育は技術者を養成するのだけでなく、オペレーターやデザイナー志向の学生やステージの仕事なども含め照明の現場に携われればという学生がいてもおかしくはありません。これは、最終的に学生個人が選択することです。こうした場合にこそ、創造性豊かな照明デザイナーを育てるといふ教育理念が生きてくるのではないのでしょうか。それぞれの教育の中で、いかに照明デザインのプロセスを考えさせるかということです。

舞台照明は、劇空間と設備がなければ光を表出することができません。照明デザイナーが、考えていることがはじめて劇空間で表現されるわけです。シュミレーションを行う時間があれば、照明デザインの意図を理解してもらうことができます。予め稽古場で照明器具を仕込み、照明デザイナーの考えている色彩や変化のタイミングなどを見せられることができればとても理想的です。学生諸君が仕込み図やQシートを書き、どのような方法で照明表現したいのか、学生諸君自体が先が読めていない場合があります。それは頭の中にイメージはあっても、先が読めないことによって照明デザインを具体的に組み立てることができない場合です。照明のことばかり考えすぎて、戯曲（台本）や舞踊構成を全体的に把握することが、おろそかになってしまうことがあります。演出意図を理解させ、学生諸君のイメージを崩さずに、それぞれの感性をいかに引き出すか。これを引き出すのに苦労し悩むところです。

上演芸術には、いろいろなものがあります。照明も多くのジャンルから成り立っています。舞台照明コースの教育は、演劇を第一に考えさせ、演劇のプロセスを大事に理解させることにあります。それぞれ戯曲作品が多くあるなかで、その中には写実の作品や非写実の作品もあります。学生が一番最初に上演体験する作品は、写実の作品を教材として扱うことを基本としています。昼間の明かりがどのように見えるのか。自然光がどのような角度で家の中に入ってくるのかなど、天然光源や人工光源を理解させ四季折々の観察をするように指導を行っています。

写実表現を劇場空間の中で行うことは大変に難しいことです。上演芸術は虚構の世界であり、舞台上で上演されているものは観客も嘘だと理解したうえで見ています。舞台照明の定義は、演出の意図を観客に正しく見せるため、光の量（明るさ）や光の質（方向）を考慮しなければなりません。

演技の行われている場面の季節や昼夜の別・時間・天候の変化などを現実らしく、見せなければなりません。また、光を出すことによって俳優や舞台装置・衣裳などを演劇的に美しく見せなければなりません。俳優の心理や描写を表現手法として具体化し、喜怒哀楽や雰囲気によって劇的感情を醸しださなければなりません。このように照明の構成要素（視覚・写実・審美・表現）が融合して劇空間を創り上げていきます。そのプロセスが理論上で判っていても、実際に自分が照明デザインを担当することになるとパニックになってしまいます。どうしても経験不足という壁にぶつかってしまい、初めて受け持つデザインに対しての緊張感や不安感が出てきてしまいます。それをどのように軌道修正をしていくか、そして教育の難しさを常日頃感じています。

専門学校と違って毎日照明の授業を行っている訳ではありませんので、教室での講義を裏付ける実験実習もまた、時間不足がちになってしまいます。特に、色彩をどのように考えさせ、表現させるか、かつ、使用される色彩の選択をどのように学生諸君に考えさせるか、その難しさを教育に携わっていて痛感します。見本帳で見る色あいと実際に照明器具から出た光の色あいの違いを経験の少ないところではつかむことは非常に難しい事です。これはたっぷりと時間を掛けて、教育をしていくに他なりません。

この数年来、劇場の舞台機構や、ホールの機能は、ハイテク技術を応用して益々高性能化することでしょう。舞台照明の周辺も同様に優れた機器が開発改良されてきています。特に新技術を取り入れた調光操作システムやスポットライトにおいては、コンピュータシステムが導入され操作性においてもアナログから比べると、今までにないさまざまな演出表現が可能になりました。視覚的な美しさや時間的な変化を自由自在にコントロールすることができ、表現の幅が飛躍的に広がったと言えます。演出的要求に十分に応えて、場面の溶暗・溶明・暗転・明暗、それぞれ複雑な変化に対応できるようになりました。エレクトロニクスがもたらした劇場技術の進歩によって、舞台芸術の表現に大きな可能性が生まれてきました。

劇場技術の変貌を気にしながら4年間で照明の教育をすることには限度があります。卒業後、世の中に出てすぐに照明デザイナーとして活躍できるわけではありませんが、新しい技術も含めて照明の考え方・プロセス・理論や舞台技術などを勉強させてきたことについて評価がなされていると自負しています。これからも、舞台芸術の現場で要求される才能を引き出すこと、高度な技術を支える感性などについての総合的な育成をめざしていきたいと思っています。